

野菜・果実の月別販売データから見る産直市の独自性

——香川県三豊市「良心市たかせ」を事例に——

**A Study on Characteristics of Farmers' Markets
using Monthly Sales Data of Vegetables and Fruits:
A Case Study of “Ryosin-ichi Takase” in Mitoyo City, Kagawa Prefecture**

平 侑子・吉田 雄介

TAIRA Yuko & YOSHIDA Yusuke

本稿は、産直市がどのような特徴を持った販売施設であるのかを、香川県三豊市に立地する「良心市たかせ」の実際の販売データを事例に、季節性と品ぞろえの観点から検討する。

良心市たかせの野菜および果実の月別売上高の推移を整理したところ、産直市の品ぞろえとして2つの特徴が見出された。一つめは、地元産の主要な野菜に関しては、年間通して提供することができる点である。地域の生産者がごく少数から産品を持ち込める産直市では、旬を外れて大手流通に乗らないような少量の県内産品であっても店頭と並べることができるため、消費者は年間通して県産品を手にする機会がある。二つめは、果実や一部の野菜などで、季節性が顕著に表れる点である。産直市では基本的には地域から持ち込まれる野菜・果物を取り扱うため、スーパーマーケットのように積極的に県外産品によって品ぞろえを補わない。そのため、特に果実の場合は旬の数か月だけしか店頭と並べないものも多く、毎月入れ替わるように様々な旬の果実が扱われている様子が、データから見て取れた。以上のように本稿では、産直市の特徴は、野菜のように年間通して地元の産品が手に入られる側面と、果実のようにリレー形式で地元の旬のものが手に入れられる側面が両立している点にあると結論づけた。

キーワード：三豊市、農産物直売所、産直市、地産地消、野菜、グリーン・ツーリズム

Key Words: Mitoyo City, Farmers' Market, Local Production for Local Consumption, Vegetables, Green Tourism

1 はじめに

筆者らは、前号で、三豊市の合併までの旧7町の農業生産の動向を、特に野菜と果樹栽培に注目して分析した(吉田・平 2022)。その結果、特定の品目を除き、野菜や果樹栽培面積が減少していることがわかった。その一方で、市内各地の産直市には大勢の買物客が訪れて活気にあふれている。なかでも旧高瀬町は、三豊市内でも最も野菜栽培が盛んな地域のひとつである。そのため、後述するように旧高瀬町域には農産物直売所・産直市が集中している。

地域の農産物と観光振興の関係についてはさまざまな方向性が考えられるが、農産物直売所や産直市もその一つである。農林水産省は、農産物直売所や産直市を、地産地消の取り組みのなかで重視する一方で、いわゆる都市農村交流やグリーン・ツーリズムの一部にも位置づけている(農林水産省都市農村交流課 2009)。あるいは、ヨーロッパと日本の違いを踏まえた上で日本型グリーン・ツーリズムを検討する研究においても、直売所・産直市の存在は重視

されている(たとえば、井上・中村・山崎 1996: 21 ふるさと京都塾 1998)。実際、本稿で対象とする産直市「良心市たかせ」も地元住民だけでなく県内外からのたくさんの買い物客でにぎわっており、この施設も地域観光振興に一定の役割を果たしていると評価できる。

そもそも直売所・産直市は、スーパーなど量販店での販売とどこが違うのか、あるいは観光客を含む地域内外の消費者をどう引きつけているのか、地産地消を推進する人材の育成を行っている農林水産省生産局技術普及課は「品ぞろえを年間を通じて確保することが必要」(2008: 3)とした上で、品ぞろえのための取り組みと特徴のある直売所づくりを提言している。1,150施設から回答を得た「まちむら交流きこう」の2018年度の直売所実態調査でも、店舗営業の課題として「季節による商品不足」(56.2%)が挙げられている(まちむら交流きこう 2018: 22)。

同様に、以前から香川県においても量販店との違いをどこに見出すのか、どうやってできるだけ多くの品をそろえるのか、こうした点が産直市の課題だとされてきた(高

橋 1995: 17). 品ぞろえの問題は、筆者らが三豊市の産直市で聞き取りをした際にも大きな問題であると耳にし、実際、産直市によっては商品の確保のために週の何日かを休みにして営業を毎日していない施設も見受けられた。このように産直市にとって品ぞろえは重要な問題である。同時に、量販店とは異なる地域独自の品ぞろえも重要となる。筆者らが聞き取りをした高瀬町の別の産直市の責任者は、「11, 12月に『スイカはないん?』って買い物客から言われた」こともあるが、それに対し、産直市では一年中何でもそろそろスーパーマーケットとは違う点を際立たせたいと心意気を語ってくれた。

今回、高瀬町の産直市のひとつである「良心市たかせ」のご厚意で、2021年の月別・品目別の販売データを利用する機会を与えられた。後述するように、良心市たかせは数ある三豊市内の産直市のなかでも老舗で、しかも市内では売上規模が最大の組織である。本稿の目的はこのデータを使用して、産直市の品ぞろえの問題と商品の特徴について確認することである。

産直市の品ぞろえに関する研究は、各地で多数行われている。一例を挙げれば、飯坂(2003)は、自身が導入試験を行っている広島県世羅町の直売所のPOSデータを分析し、「その日の売上動向がPOSデータの分析によって予測可能になれば、残品発生リスクを軽減しながら午後の生鮮品の品揃えを確保することができるようになる」(飯坂 2003: 58)と結論づけている。河田・藤原(2010)は岡山県の複数の直売所の販売データ(POSデータ)を利用して、野菜の品ぞろえを検討している。あるいは、高梨子その他(2020)は、青森県つがる市の最大の直売所に出荷する専業農家1世帯を抽出し、直売所の出荷と野菜複合経営の関係を検討している。このように全国各地で多くの研究があるが、当然ながら作物の栽培や収穫には地域性が大きい。そこで、本研究は、三豊市における良心市たかせでその状況を確認し、既存の研究事例に産直市の品ぞろえに関する研究の一事例を加えたい。

以下にまず、三豊市の農業の特徴について、野菜栽培と果樹栽培を中心に検討する。次に、本稿で分析対象とする良心市たかせの産直市としての特徴を、三豊市の産直市のなかで検討する。その上で、良心市たかせの2021年の月別販売データを使って、主力の野菜と果実に着目し、上位の品目の品ぞろえと季節的な変化を確認する。さらに、香川県最大の卸売市場である高松中央卸売市場の月別販売データと比較することで、この産直市の品ぞろえの独自性を考察したい。

2 三豊市と農業

2.1 合併以前の状況

三豊市合併(2006年)以前の農業の状況を吉田・平(2022)から整理しておこう。野菜に関しては、早い時期に三豊地域が指定産地となったタマネギ、キュウリ、レタスの3品は、かつては大規模に栽培されていたものの、合併直前までに栽培面積は大幅に減少した。それでも、この3品は2004年時点において三豊地域の主力野菜であった。

1960年代後半から70年代初めにかけて、それまで作付面積の少なかったハクサイ、キュウリ、ハウレンソウ、キャベツなどが作付面積を増やし、この時期に野菜栽培の多様化が進んだ。それ以降も、ニンニクやアスパラガス、カリフラワーなどの導入が進み、一時的に生産量を伸ばした。しかし、その後も栽培面積を維持できた作物はごく少数である。その例外が、合併直前に急増し、野菜の中で最大の作付面積を占めるようになったブロッコリーである。

現在の三豊市は、7町が合併したため、地域差が大きい。その典型としてブロッコリーに着目すると、三豊市域全体で栽培されていたわけではなく、2004年時点では、豊中町が栽培面積の8割を占めた。この時点ではブロッコリーを除くと、高瀬町がレタスの5割、タマネギの4割弱、キュウリの4割弱、キャベツの8割以上を占めた。つまり、合併時点では高瀬町が三豊市域における野菜栽培の中心であったといえる。

果樹栽培に関しては、1970年代に入るまで7町全てにおいて温州ミカンの普及に努めたため、いずれの町でも広大なミカン園が開発された。仁尾町が最大の面積を占めたが、1970年代初めには高瀬町が仁尾町に並ぶ栽培面積となった。しかし、その後高瀬町ではミカン園の面積は急激に減少した。ミカンを除く果樹に関しては、一定の栽培面積があるのはブドウとモモである。ただし、ブドウ栽培も地域差が大きく、豊中町(中でも桑山地区)が香川県下最大の産地であり、三豊市域では高瀬町と三野町が続いた。なお、高瀬町のブドウ栽培は麻地区ではなく、上高瀬地区や比地二地区が中心だった(高瀬町 1975: 98)。モモは戦前から栽培されていたが、戦後はミカン栽培に押され下火となったが、1970年代に入り、高瀬町上麻地区の山林が開発され集団産地が形成された(高瀬町誌編集委員会編 1975: 98)。

2.2 合併後の状況

2.2.1 野菜栽培からみる三豊市の農業

表1 三豊市の販売目的の野菜類の作物別経営体数

2010年		ブロッコリー	タマネギ	キュウリ	ダイコン	キャベツ	ネギ	レタス	ホウレンソウ	ハクサイ	ナス	カボチャ	ニンニク	サトイモ	ソラマメ	アスパラガス	トマト	イチゴ	スイカ	ピーマン	その他の野菜
香川県計	1,610	1,447	1,001	1,039	834	1,117	1,256	864	798	923	450	517	583	521	481	704	478	277	425	4,650	
三豊市(A)	289	256	155	143	125	120	114	112	111	99	65	62	60	57	54	53	48	48	38	456	
高瀬町	71	105	64	59	71	48	55	52	44	39	36	21	27	34	12	17	8	24	15	163	
上高瀬村	14	19	14	9	6	5	18	8	7	8	6	2	5	10	2	6	1	5	3	22	
勝間村	14	28	14	11	7	22	10	9	10	7	8	2	4	8	3	3	1	5	2	38	
比地二村	18	7	3	4	-	4	15	3	2	4	-	1	1	1	-	1	-	-	-	5	
二ノ宮村	6	9	13	5	7	3	10	4	2	3	1	1	2	3	3	2	1	-	2	5	
麻村(B)	19	42	20	30	51	14	2	28	23	17	21	15	15	12	4	5	5	14	8	93	
山本町	24	22	11	3	6	11	7	5	4	1	2	16	1	4	9	4	3	1	1	23	
三野町	34	46	22	23	12	20	24	11	13	14	7	7	8	6	10	8	8	5	4	78	
豊中町	140	24	20	20	12	16	8	16	19	20	3	5	6	5	9	8	3	5	3	74	
詫間町	5	26	1	5	2	5	4	3	4	5	4	1	1	1	3	2	1	2	1	14	
仁尾町	2	3	1	-	1	1	5	-	-	-	-	-	-	5	3	1	5	-	-	3	
財田町	13	30	36	33	21	19	11	25	27	20	13	12	17	2	8	13	20	11	14	101	
B/A×100(%)	6.6	16.4	12.9	21.0	40.8	11.7	1.8	25.0	20.7	17.2	32.3	24.2	25.0	21.1	7.4	9.4	10.4	29.2	21.1	20.4	
2020年		ブロッコリー	タマネギ	キュウリ	ダイコン	キャベツ	ネギ	レタス	ホウレンソウ	ハクサイ	ナス	カボチャ	ニンニク	サトイモ	ソラマメ	アスパラガス	トマト	イチゴ	スイカ	ピーマン	その他の野菜
香川県計	1,397	652	367	383	398	475	646	293	289	379				213			268	287	85	109	2,039
三豊市(A)	271	122	75	56	94	43	62	35	55	70				x			29	24	22	17	283
高瀬町	60	38	26	19	55	17	37	7	18	23		細目なし	細目なし	x	細目なし	細目なし	7	3	8	5	80
上高瀬村	12	6	6	3	3	2	10	-	2	2				x			2	-	1	-	8
勝間村	16	13	6	3	8	5	9	-	3	5				x			-	-	1	-	6
比地二村	17	2	2	1	-	1	11	1	-	3				x			-	-	-	-	5
二ノ宮村	6	2	7	4	4	3	5	2	4	2				x			3	-	-	1	15
麻村(B)	9	15	5	8	40	6	2	4	9	11				x			2	3	6	4	46
山本町	33	18	9	5	6	5	4	5	8	8				x			1	4	-	2	49
三野町	28	13	4	2	4	4	6	4	3	2				x			2	-	1	-	19
豊中町	110	21	11	10	17	6	6	9	10	14				x			6	-	4	2	35
詫間町	5	7	-	-	-	1	1	-	-	-				x			1	-	-	1	8
仁尾町	6	1	-	2	1	1	1	-	2	1				x			-	1	-	-	3
財田町	29	24	25	18	11	9	7	10	14	22				x			10	13	8	7	64
B/A×100(%)	3.3	12.3	6.7	14.3	42.6	14.0	3.2	11.4	16.4	15.7				-			6.9	12.5	27.3	23.5	16.3

出典：農林業センサスより作成。

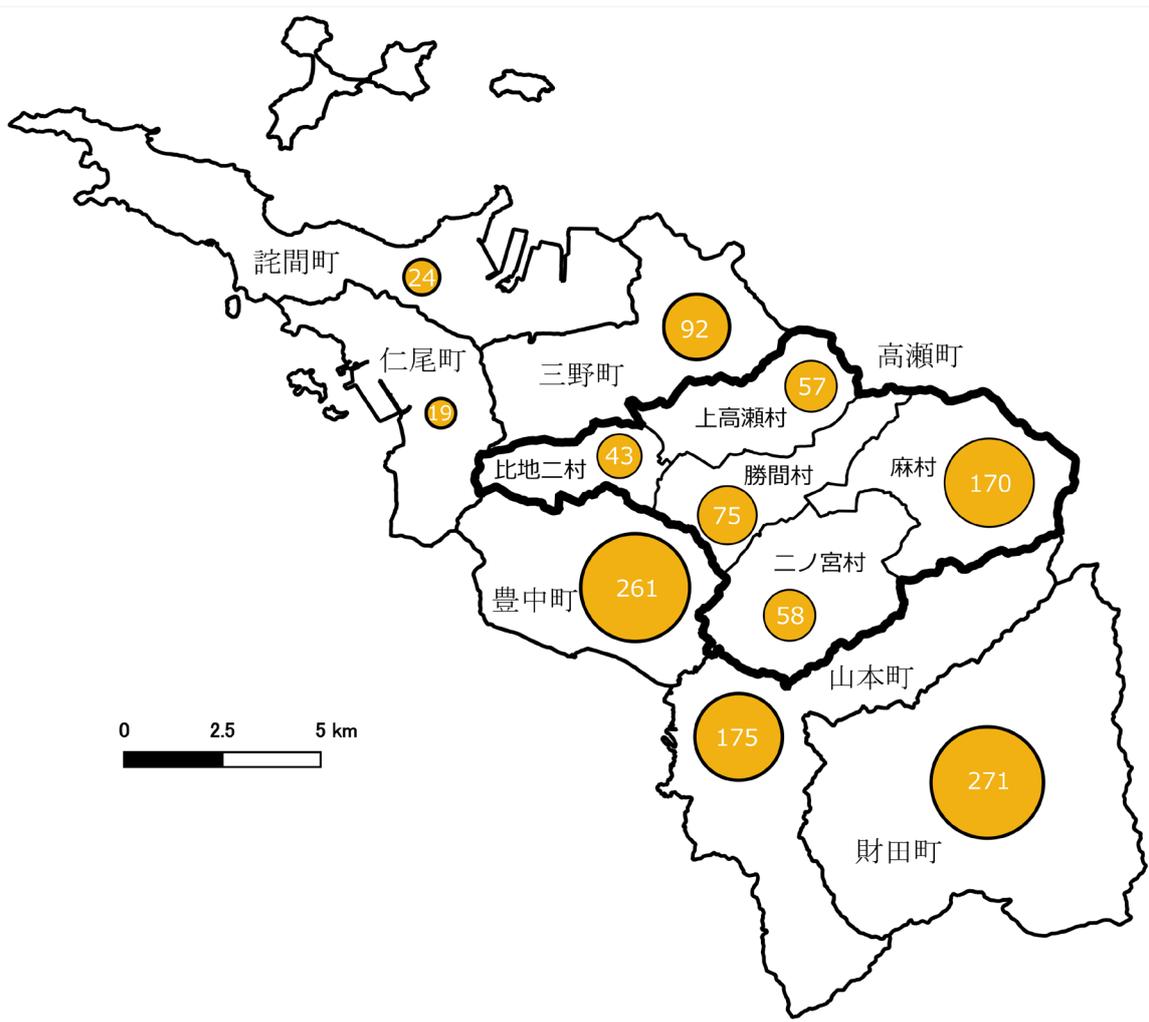


図1 2020年農林業センサスの販売目的の野菜類の経営体数(延べ数)

注:延べ数は,秘匿データの「さといも」を除く。

合併後の野菜栽培の状況については、農林業センサスを基に確認することにしよう。なお、2010年農林業センサスの「販売目的の野菜類の作物別作付経営体数」は項目が詳細なため、2010年と2020年の値を表1に示した。農林業センサスでは作付面積も掲載されているが、作付面積に関しては秘匿データが多いため、ここでは経営体数を利用する。当然、経営体数は多くても個々の耕作規模は零細な場合も考えられるが、この資料では規模の大小まではわからない。また農林業センサスでは、農業集落別に数値が得られるので、旧高瀬町については農業集落別に値を示し、高瀬町以外の六町に関しては旧六町の農業集落をまとめて示した。表1は、三豊市において経営体数の多い順に左から右に作物を並べてある。なお、三豊市全体で38経営体未満の作物は「その他の野菜」にまとめた。

図1には、2020年の野菜類の作物別作付経営体数の延べ数を旧町ごとに示した。高瀬町については農業集落ごとに表示したが、合計すると財田町や豊中町を大きく上回る。その高瀬町において最大の延べ数を有するのが麻村である。後述するように良心市たかせも店舗の位置は移動したものの一貫して高瀬町麻地区に立地してきた(上麻地区・下麻地区の別でいえば、上麻地区に立地)。ただ、今では麻地区のみならず、広く三豊市およびその周辺市町に供給

者がいる。麻村の経営体数を確認すると、2010年時点では、三豊市域全体で最大であるブロッコリーの経営体数が麻村では少ないことがわかる。また、レタスの経営体数も極端に少ない。こうした一部の作物を除くほとんどの作物は、麻村が三豊市に占める比率は1割を超えている。そして、三豊市域で経営体数の多いタマネギやキュウリ、ダイコン、キャベツなど全国的に重要な作物であるいわゆる指定野菜は麻村の占める比率が高い。ただ、2020年になると、麻村の経営体数が三豊市に占める比率は、キャベツなどの少数の野菜を除き、減少した。ここからも農業の衰退傾向を知ることができる。なお、三豊市全体で見ても、ブロッコリーやナスを除けば、いずれの作物も経営体数は半減ないし3分の1に激減しており、激しい衰退傾向は麻村地域に限られない。

2.2.2 果樹栽培からみる三豊の農業

同じように果樹に関しても農林業センサスから経営体数を示す表2を作成した。先に述べたように、柑橘類は旧仁尾町、ブドウは旧豊中町が三豊市内で最大の産地である。これには及ばないものの、麻村も2010年時点では、温州ミカン、その他の柑橘、ブドウについても1割前後

表2 三豊市の販売目的の果樹類の作物別経営体数

2010年																
	温州ミカン	その他柑橘	リンゴ	ブドウ	日本ナシ	西洋ナシ	モモ	オウトウ	ピウ	カキ	クリ	ウメ	スモモ	キウイ	パイナップル	その他の果樹
香川県計	2,110	878	11	586	87	3	522	6	380	463	83	102	92	163	-	208
三豊市(A)	697	264	3	290	8	-	199	-	103	128	18	32	12	51	-	33
高瀬町	179	84	1	100	6	-	111	-	4	61	10	11	4	25	-	6
上高瀬村	28	16	-	25	-	-	22	-	1	5	1	2	1	2	-	-
勝間村	6	3	-	12	-	-	16	-	-	6	1	2	-	1	-	1
比地二村	42	31	-	24	-	-	14	-	-	-	1	-	-	2	-	-
二ノ宮村	13	5	1	12	1	-	5	-	1	3	1	-	1	-	-	2
麻村(B)	90	29	-	27	5	-	54	-	2	47	6	7	2	20	-	3
山本町	16	8	-	-	-	-	1	-	-	3	2	-	-	-	-	2
三野町	89	37	-	26	2	-	39	-	5	9	1	6	1	2	-	5
豊中町	78	60	2	158	-	-	-	-	1	3	-	3	1	11	-	3
詫間町	35	13	-	5	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
仁尾町	239	46	-	-	-	-	-	-	93	2	-	-	1	10	-	4
財田町	61	16	-	1	-	-	48	-	-	50	5	11	5	3	-	12
B/A×100(%)	12.9	11.0	-	9.3	62.5	-	27.1	-	1.9	36.7	33.3	21.9	16.7	39.2	-	9.1
2020年																
	温州ミカン	その他柑橘	リンゴ	ブドウ	日本ナシ	西洋ナシ	モモ	オウトウ	ピウ	カキ	クリ	ウメ	スモモ	キウイ	パイナップル	その他の果樹
香川県計	1,029	482	8	380	59	2	300	3	151	218	44	31	39	115	2	235
三豊市(A)	335	151	2	179	8	x	94	1	48	57	x	8	5	x	x	35
高瀬町	68	44	0	66	4	x	50	1	1	26	x	4	1	x	x	9
上高瀬村	7	10	-	19	1	x	17	-	1	4	x	-	1	x	x	1
勝間村	2	3	-	9	-	x	9	-	-	3	x	1	-	x	x	2
比地二村	9	11	-	14	-	x	4	-	-	1	x	-	-	x	x	-
二ノ宮村	1	2	-	7	1	x	-	1	-	1	x	1	-	x	x	2
麻村(B)	49	18	-	17	2	x	20	-	-	17	x	2	-	x	x	4
山本町	8	3	-	1	-	x	1	-	-	2	x	-	1	x	x	1
三野町	34	17	2	18	1	x	16	-	-	7	x	1	1	x	x	3
豊中町	38	38	-	89	-	x	1	-	-	1	x	-	1	x	x	6
詫間町	13	3	-	3	-	x	-	-	-	-	x	-	-	x	x	-
仁尾町	137	36	-	1	-	x	1	-	46	2	x	-	1	x	x	5
財田町	37	10	-	2	2	x	25	-	1	19	x	3	-	x	x	11
B/A×100(%)	14.6	11.9	-	9.5	25.0	-	21.3	-	-	29.8	-	25.0	-	-	-	11.4

出典：農林業センサスより作成。

を占める。それ以外の果樹に関しては、麻村が済める比率は、ビワを除き、非常に高い。しかし、10年後の2020年になると麻村の経営体数は大幅に減少した。この点、野菜と同様に果樹の衰退も著しい。これは三豊市全体についても同様である。

3 良心市たかせ

3.1 良心市たかせの概要

図2に示したように、2022年現在、旧三野町を除く6つの町に直売所・産直市がある。そのうち旧高瀬町の範囲には6つの直売所・産直市が集中している。旧高瀬町域の6つのうち4つは高瀬川に沿って通る県道23号線の沿線に立地している。

三豊市高瀬町上麻地区にある有限会社「良心市たかせ」は、三豊市域では最も古株の産直市のひとつであり、現在は正月三が日を除き毎日営業をしている。店舗内には、生産者が直接持ち込んだ野菜・果物を中心に、米、花き、肉、惣菜・菓子などの加工品が並ぶ(図3)。図4に示される

ように駐車場も広く、比較的多くの集客を見込める店舗である。店舗の営業時間は朝7時から18時までであるが、朝6時半ごろから生産者自身が野菜や果実などの産品を随時持ち込む。なお、毎週木・土・日曜日には店舗前で魚市を開催しているが、主催は別団体であり、良心市たかせが運営しているわけではない。

良心市たかせは、1980(昭和55)年に結成された農業後継者の会である4Hクラブの「高瀬若あゆ会」が、結成12年目の1992(平成4)年に、高瀬町上麻地区に無人販売所形式で産直市を開設したのを起源とする(高瀬若アユ会1992:54)。当時の香川県では、まだ産直市の数は少なく、「産直市」そのものの知名度も高くなかった。そのため、競合相手がほとんどいなかったこともあり、「若あゆ会」が産直市を開設して3年後には売上が2億円に届くほど順調であり、有限会社へと移行した。最初は若手農家だけで始めた市場も、このころには農産物を持ち込む会員数がすでに150~200人に達していた。

2018(平成30)年に、店舗を現在の地へ移転し、現在は元「若あゆ会」の一員であった辻野氏が取締役として良心市たかせを運営している。2022年11月末現在の従業員



図2 2022年時点の三豊市内の農産物直売所・産直市の分布

出典：三豊市役所およびその他での聞き取りにより筆者作成。



図3 良心市たかせの野菜売場（2022年6月撮影）



図4 良心市たかせの外観（2022年12月撮影）

員数は、常勤が取締役である辻野氏を含め3名、パートが10名いる。現在、出荷者である会員数は、高齢化により減少傾向にあるものの、旧高瀬町の農家や業者を中心に三豊市内外で合計350～450人である。香川県内のスーパーマーケットに産品を卸すほか、地元の小中学校の給食のために、農産物を提供することもあるが、やはり店舗での販売が主力である。店頭販売の年間売上高（2021年）は4億円を上回り、この地域でも最大級の産直市である。

一方、店舗での購入者は地元のみならず、広範囲から訪れる。三豊市以外にも、坂出市、高松市、愛媛県四国中央市などからのリピーターがおり、観光バスがトイレ休憩も兼ねて立ち寄ることもあり、団体客も店舗を利用している。

3.2 良心市たかせを事例に考える産直市の特徴

3.2.1 良心市たかせで扱う商品の売上傾向

本項では、良心市たかせの産直市としての特徴を、2021年の月別販売データを用いて検討する。良心市たかせでは、1年間の売上データを、売上金額と数量で記録し

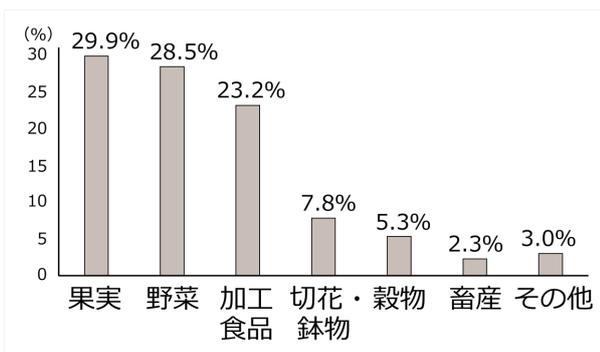


図5 良心市たかせの種別売上の割合（2021年）

出典：良心市たかせの社内資料により作成。

ている。ただ、数量に関しては、一袋に入った個数が1つであれ複数であれいずれの場合も個数を「1」と換算しているため、品物の種類ごとに比較することは困難である。よって、本稿では売上金額を用いて考察する。具体的には、良心市たかせが取り扱う野菜の売上上位の品目の月別売上高の推移を検討する。次に、比較対象として同品目の高松中央卸売市場の月別推移を確認し、さらに品目ごとに良心市たかせと高松中央卸売市場のデータを検討する。最後に、果実販売の特徴を確認する。

まずは、良心市たかせが取り扱う商品を、野菜、果実、加工食品、切り花・鉢物類、穀物、畜産、苗・種、その他に分類し、それぞれの売上が年間売上全体に占める割合を示した（図5）。最大の売上は、3割を占める果実（29.9%）であり、わずかではあるが野菜の売上を上回っている。果実は顧客の人気が高く、生産者を指定して購入するリピーターも少なくない商品である。また、夏から秋にかけて、ブドウやモモなどが贈答品として箱詰めされ、比較的高額で販売されている。これらの贈答品は、店舗から直接送ることができる工夫もされている。続いて売上金額が多いのは野菜で、28.5%を占めた。野菜は、店内において最も広い売り場面積を持つが、基本的には1袋100～300円前後の価格が設定されている。そのため、単価が高い果実よりも、売上金額が下回る結果となった。つづいて、加工食品が総売上高のおよそ4分の1を占めた。加工食品には、パンやジャム、缶詰、豆腐、惣菜、菓子のほか、乾燥豆なども含まれている。加工食品を持ち込むのは、個人の場合もあれば、地元の食品加工業者の場合もある。そのほか、売上金額の順位は、切り花や鉢物、穀物（米と豆）、畜産（肉類と卵）、その他が続く。なお、その他には雑貨類、堆肥、魚市以外で販売されている魚、飼育用の昆虫やメダカなどが含まれる。

果実、野菜、加工食品という上位3項目が総売上高に

占める割合は、全体の80%に達しており、良心市たかせではこの3種が店舗の主力であることがわかる。加工食品は先述の通り内容が多岐に渡っているため、次項以降は野菜と果実に焦点を絞り、検討を続ける。

3.2.2 主要な野菜の月別売上高の推移

次に、良心市たかせにおける野菜の売上について検討する。良心市たかせでは、58品目の野菜が販売コードとして登録されており、表3はそのうち年間の売上金額の上位11品目をまとめたものである。

一年間で最も売上高が多かったのはタケノコであり、野菜全体の年間売上高の11.4%を占めた。タケノコは、後述する他の野菜とは異なり、販売時期が12月から7月に限られている。とりわけ4月の売上金額は突出しており、タケノコの4月の売上だけで野菜売上総額年間4位であるトマトの1年分の売上高を超える。なお、良心市たかせが店舗を構える高瀬町麻地区は、戦後、県下のタケノコの生産量を誇る地域であった(高瀬町誌編集委員会編1975:107)。タケノコのみが群を抜いた結果となっているのは、高瀬町に店舗を構える産直市ならではの傾向であろう。

2位以下の品目を見ると、ナスやトマト、キャベツ、タマネギ、ジャガイモなど家庭で日常的に使われる主要な野菜が上位に並ぶ。また、これら上位の野菜の多くが、野菜の中でも特に消費量の多い、いわゆる「指定野菜」である。

表3 野菜上位11品目の年間野菜総売上に対する割合(2021年)

品目	野菜全体の年間売上高に占める比率(%)
タケノコ	11.4
ナス	6.8
キノコ	6.7
トマト	5.9
キュウリ	5.8
キャベツ	4.4
ネギ	3.7
タマネギ	3.7
イチゴ	3.5
ブロッコリー	2.8
ジャガイモ	2.8

出典:図5と同じ

なお、当店舗のデータとしては、キノコはあらゆる種類を「キノコ類」とまとめている。

このうちデータとして突出しているタケノコ、およびさまざまな種類をまとめているため季節性がうかがえないキノコ類を除いた上位9種類の売上金額を、月別の推移としてグラフ化した(図6)。良心市たかせでは、生産者が自ら製品の価格を設定して販売しているため、1品あたりの価格は年間を通じて変動する。

この図6をもとに、産直市における野菜販売の季節的な特徴を探っていく。グラフのうち、途切れている部分は

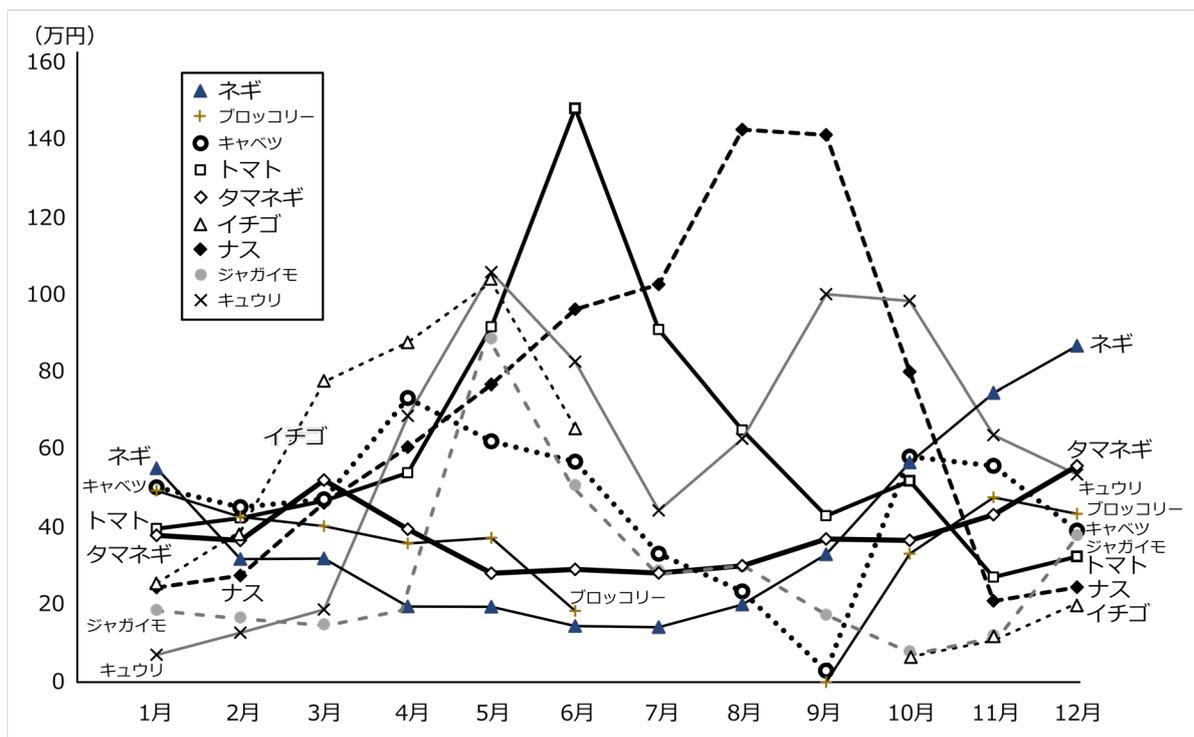


図6 野菜上位9品目の月別売上高の推移(2021年)

出典:図5と同じ。

月の売上金額がない野菜である。具体的には、年間で売上がない月が生じているのは、7～9月に端境期を迎えるイチゴと、8～9月のブロッコリーの2品目のみであった。その他は、年間を通して多少とも売上が確認でき、家庭で使用される主力野菜のほとんどが、常に店舗に用意されている状況が見てとれる。

品目別に見ると、全体売上で2位のナスは、夏野菜のため8～9月に売上のピークがある。しかし、冬期でもわずかながら販売されており、最も売上が低い11月であっても、20万円強の売上がある。トマトも同様で、ピークは6月であるが、寒い時期も一定数の販売があり、促成栽培による供給が一定量あることがうかがえる。

一方、キュウリの売上のピークは5月と9～10月であり、7～8月は低い値を示している。JA香川県によると、香川県のキュウリの作型は夏秋キュウリが約7割、冬春キュウリが約3割となり、出回りの最盛期は6～8月とされている¹⁾。出回りの最盛期であるはずの7～8月に、良心市たかせにおけるキュウリの売上金額が低いのは、販売数が少ないのではなく、1品あたりの価格が低く抑えられているためである。実際、のちに参照する高松中央卸売市場がキュウリの月別平均単価を算出しているが、年間の平均単価が267円であるのに対して、旬である7月は118円と年平均の半額以下で扱われている²⁾。前月の6月は196円、8月になると375円と単価が跳ね上がり、7月の平均単価がひとときわ低いことがわかる。取扱高として7月の数量は他の月と比較して低いわけではないため、売

上金額で7月に谷間が出来ているのは単価の安さが理由である。

また、キャベツもピークが4月と10月の2回確認でき、グラフは一見キュウリと同様の形を示している。店舗でのコードは単に「キャベツ」としてまとめられているため詳細は不明であるが、キャベツの場合は、春キャベツと冬キャベツによってピークが分かれているため、売上金額のピークが2度生じていると想定される。

3.2.3 高松中央卸売市場における主要野菜の月別売上動向

次に、良心市たかせの特徴を見出すために、高松中央卸売市場の月別データを示す。三島によれば、大型産地や遠隔産地においては、そもそも農協の販売戦略のターゲットは、大都市中央卸売市場や中核市場におかれている（三島2005: 52-53）。1990年以降、農産物の卸売市場経由率は減少傾向にあるといわれているが、国産青果物に関しては2014年の段階で84.4%が卸売市場を経由している（藤田他2018: 37）。以上の点から、県内のスーパーマーケット等大手小売業者で取り扱われる農産物を検討するにあたり、中央卸売市場のデータを用いることとする。

図7は、図6と同年度、同品目の高松中央卸売市場における売上金額の月別推移である。なお、高松中央卸売市場のデータと、良心市たかせのデータを一致させるため、たとえば良心市たかせの「ネギ」は、高松中央卸売市場の

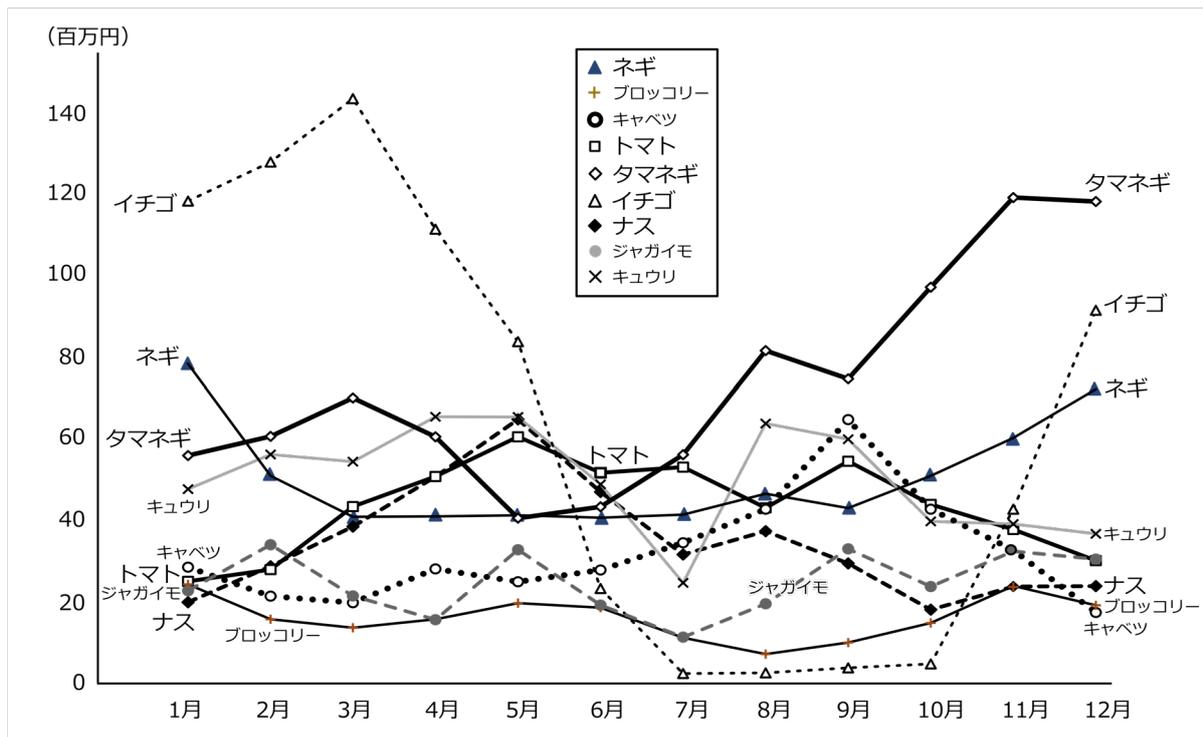


図7 高松中央卸売市場における野菜9品目の月別売上高の推移(2021年)

出典：図5と同じ。

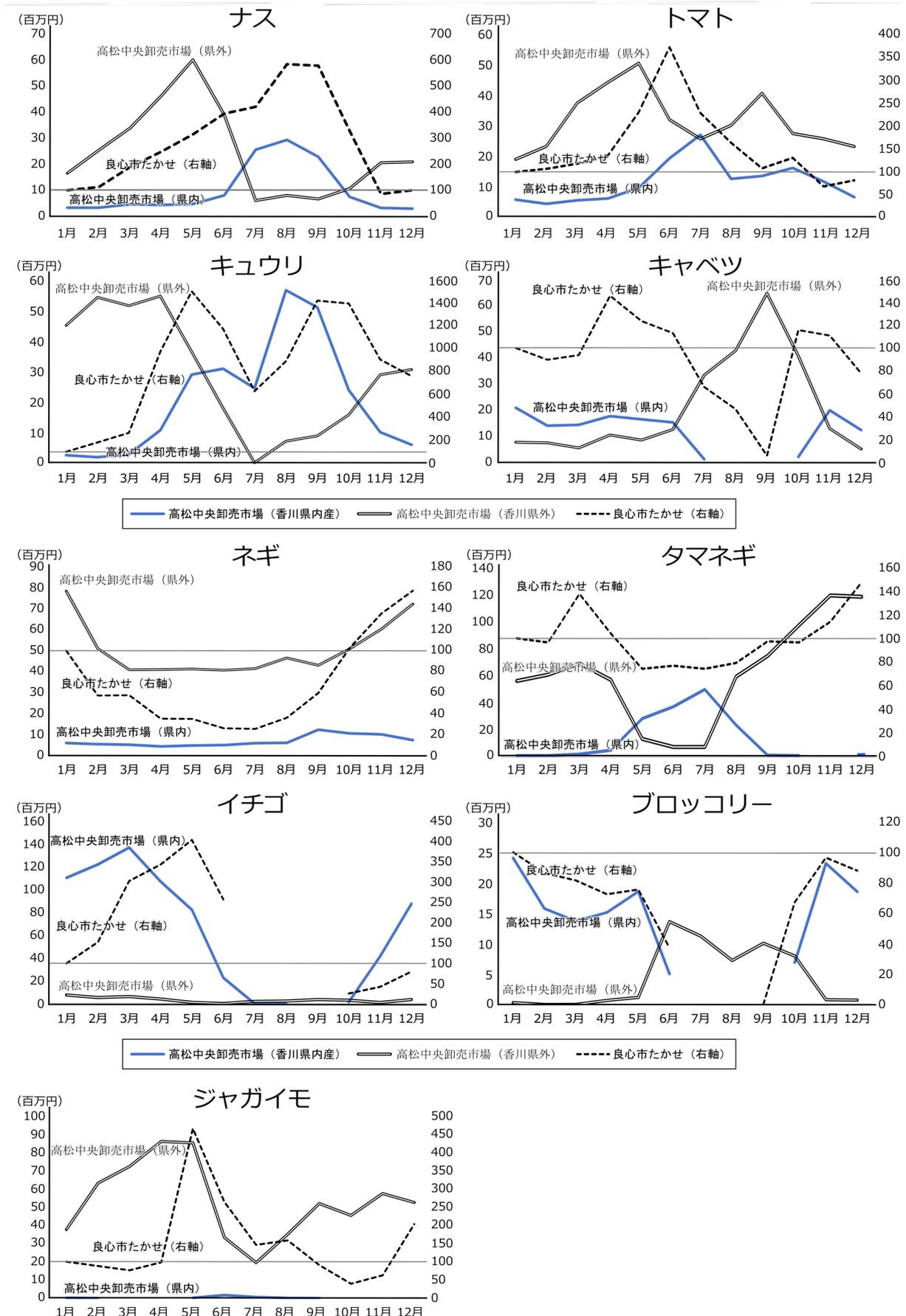


図8 良心市たかせ、高松中央卸売市場の野菜9品目の月別売上高の推移(2021年)

出典：高松市創造都市推進局産業経済部(2022)より作成。良心市高瀬に関しては図5と同じ。

注 良心市たかせの売上高は、2021年1月の売上高を100とする指数(右軸)で示した。

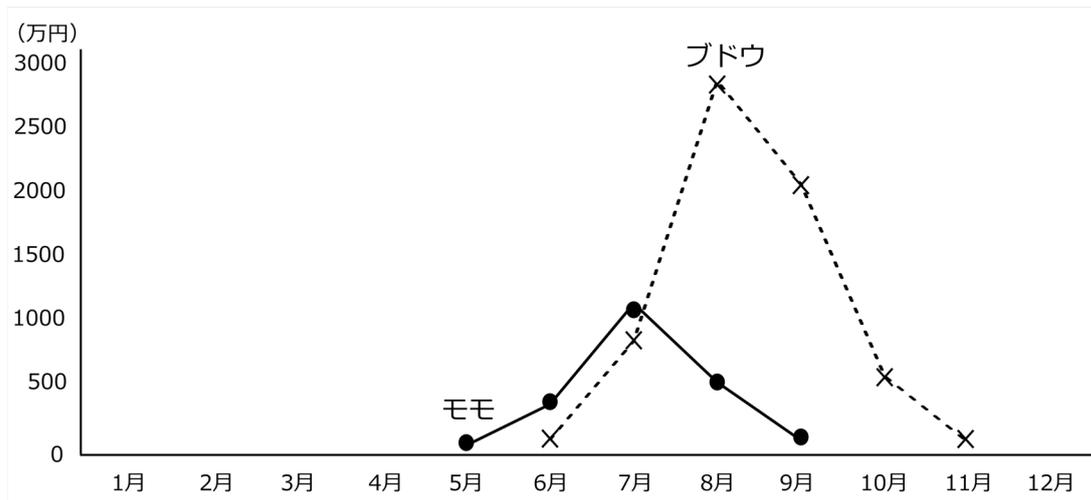


図9 ブドウとモモの月別売上高の推移 (2021年)

出典：図5に同じ。

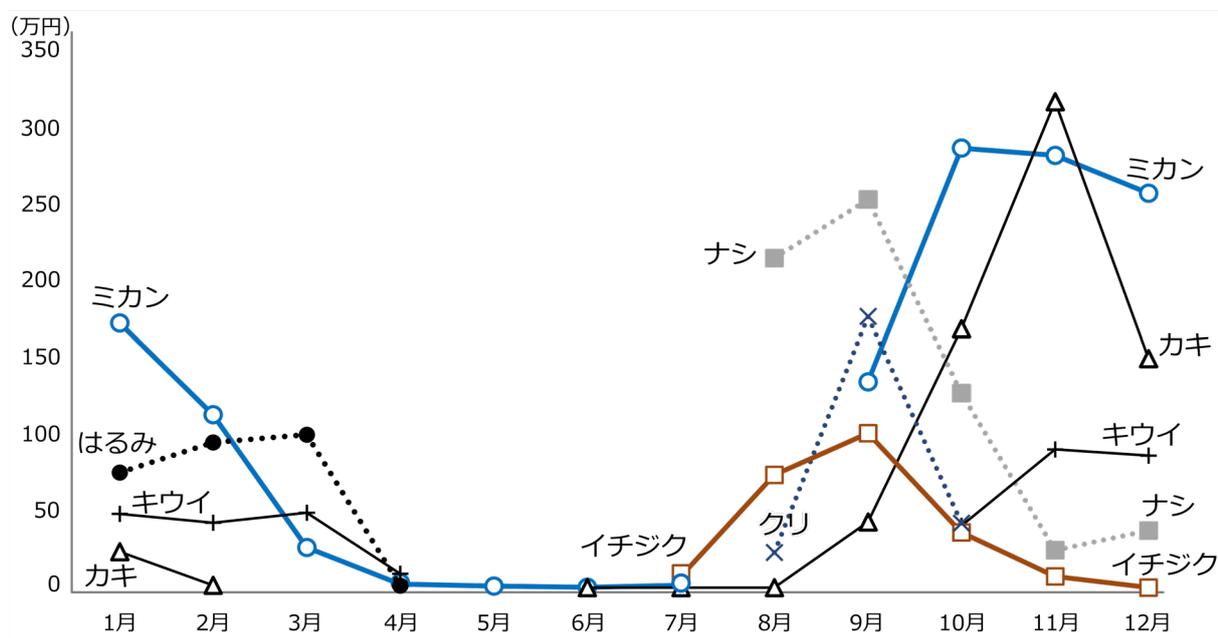


図10 果実上位7品目の月別売上高の推移 (2021年)

出典：図5に同じ。

「白ネギ」と「青ネギ」を合算したもの、「ジャガイモ」は、「パレイショ」と「メークイン」を合算したものにするなど、細分化された品目を一つにまとめている。

図6と図7を比較すると、いくつかの相違点を見出せる。たとえば、良心市たかせでは夏場に売上が途切れていたイチゴとブロッコリーは、高松中央卸売市場では金額は少ないながらも扱われている³⁾。また、ネギやトマト、ナスなどは良心市たかせでは売上金額のピークとそうではない時期の差が大きかったのに対し、高松中央卸売市場では、年間で比較的安定している。

一方、良心市たかせでは4月と10月に2回ピークがあったキャベツは、高松中央卸売市場においては、9月に1度ピークがあるのみである。この違いを考えるには、中央卸売市場で取り扱われている県外産野菜を視野に入れる必要

がある。

3.2.4 高松中央卸売市場との比較

図8は、これまで見てきた野菜9品目について、高松中央卸売市場で取引されるものを香川県産と県外産に分けて示し、かつ良心市たかせの売上金額推移を加えたグラフである。グラフ内の青線が卸売市場の県産品、二重線が県外産品である。また、点線は良心市たかせの売上金額の推移を示した。なお、良心市たかせのグラフは、1月の売上を100とした指数（右軸）で示している。

これらのグラフを見ると、まず多くの品目で、良心市たかせの売上金額の推移と、高松中央卸売市場で経由される香川県産品のグラフの推移が、比較的似た傾向を辿ってい

ることが確認できる。例えば、ナスは高松中央卸売市場を経由する県内産品（青線）も、良心市たかせ（点線）も春ごろから徐々に金額が上昇し、7～9月ごろにピークを迎えている。そして両者とも、11月ごろに低い値へと下降する。キャベツも、高松中央卸売市場の方がなだらかではあるが、良心市たかせと共に、春と秋に2回高い値を示す。また、ブロッコリーも同様で、両者とも夏期には売上金額が確認されず、11月および1月にピークが来ている。良心市たかせに持ち込まれる産品は、ほとんどが三豊市域からのものであるため、卸売市場の県内産品と似た推移を示すことに疑問の余地はないであろう。例外として、タマネギは、高松中央卸売市場が7月に最大となり、冬期は取引がなされていないのに対して、良心市たかせは年間通して比較的安定した値を示している。これには注意が必要である。実は、良心市たかせでは、地元のタマネギは3月頃から出荷が始まり、それが10月まで続き、冬期は出荷がほとんどなくなる。しかし、普段使いの野菜であるタマネギは必要不可欠なので、地元産が少ない冬場は北海道産のタマネギを仕入れている。実際、2022年は9月以降に、北海道からタマネギを仕入れた。ただし、タマネギ以外の品目は、仕入れ品はほとんどないという。

一方、これらの9つの品目における県外産（二重線）の推移であるが、当然ながら県内産の値が低い時期を補うように取引されていることがわかる。例えば、ナスは良心市を含む県内産が夏期のピークを迎える前、4～5月に大きな値を示している。反対に、県内産が十分に回っている夏期は、取引額を落としている。キュウリも、県内産品の売上がほとんどない冬から春にかけて、県外産が最大の値を記録している。ブロッコリーもその傾向は顕著で、県内産が全く回っていない夏期に県外産が多く扱われており、逆に県内産が多く回る冬～春にかけてはほとんど入荷がないことがうかがえる。県外産の野菜は、県内産野菜の収穫が少ない時期にその流通を補う役割を果たしており、1年を通してなるべく長期間、これらの主力野菜を消費者の手元に届けるために入荷されていることがわかる。

またもう一点、これらの主力野菜に関して、良心市たかせでは年間通して取り扱われている品目が多い点も注目できる。例えば、キャベツを見ると、高松中央卸売市場では県内産の8～9月は全く取引されていないのに対して、良心市たかせでは少額ながらも売上を維持している。産直市では、生産者が野菜を少数から持ち込むことができる。中央卸売市場に卸す量に達しない場合であっても売り場に並べることができるため、たとえ少数であっても地元の野菜による売上金額が記録されているということであろう。

3.2.5 果実の月別売上推移

続けて本項では、良心市たかせの果実に関するデータを整理する。図9は、良心市たかせにおける果実販売の1位のブドウと2位のモモの月別の売上額の推移を、図10はブドウとモモを除く果実の売上金額の上位9品目の売上額を月別にまとめたグラフである。良心市たかせでは、ブドウとモモの売上金額が突出して高い。これは先述した通り、両者が他の野菜・果実と異なり特に単価の高い品目であり、しかも少なくない量が箱詰めされて贈答品として販売されているためである。

上位9品目はいずれも、売上金額に季節性が顕著に表れている。例えば、ブドウが販売されているのは6月から11月までの半年間、モモは5月から9月までの5か月間、ミカンであっても8月は販売されていない。グラフの中で最も短いのはクリの3か月間であるが、良心市たかせではその他にもスモモやカリン、リンゴのように2か月しか店頭に並ばないものもある。野菜の場合は、播種や苗の植え付け時期をずらしたり、施設で促成・抑制栽培をしたりすることで、収穫時期を管理することが果樹栽培に比べて比較的容易であるため、少ない金額であっても売上金額が0にならない。つまり、野菜であれば旬からはずれても、少なからず地域産の作物が消費者の手元に届いている状況が特徴のひとつとして挙げられたが、果実の場合は野菜以上に作物の季節性に強く制約される。また、ブドウもシャインマスカットやピオーネなど複数の品種が「ブドウ」の項目にまとめられているが、実際にはそれぞれ

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ブドウ												
モモ												
ミカン												
カキ												
ナシ												
キウイフルーツ												
はるみ												
クリ												
イチジク												
不知火												
ウメ												
スモモ												
ハッサク												
レモン												
ビワ												
伊予柑												
スダチ												
スイートスプリング												
ユズ												
ボンカン												
ネーブル												
ザボン												
ダイダイ												
リンゴ												
カリン												

図11 良心市たかせにおける果実の販売時期(2021年)

出典:図5に同じ。

れの品種の旬はそれほど長くなく、品種をバトンタッチしながら半年間販売が継続する。

図 11 は、良心市たかせにおいて品目が登録されているすべての果実を取り上げ、各々が店頭で並ぶ時期と最も売上金額が高い時期を表している。売上金額が発生している時期が灰色、なかでも年間で最も大きな金額を記録する月を黒色とした。図 11 を見ると、春にははるみや不知火、ハッサクなどの柑橘類やビワなどが、売上のピークを迎える。夏にはモモやブドウを中心に、ウメやスモモ、リンゴがピークとなる。秋は、カキやナシ、キウイフルーツ、ミカン、カリンなどさまざまな品種が売れている。冬は、ユズやダイダイ、スイートスプリング、ポンカン、ネーブルなど柑橘類が売上のピークを迎えている。良心市たかせではそれぞれの販売期間が短いながらも、旬を迎える商品がリレーすることで、常に季節の果実が店頭で並ぶ。果実の種類は違えど、消費者はいつ訪れても旬の果物を購入することができる。

4 おわりに

従来から産直市の課題として品ぞろえの確保が挙げられてきたが、実際に年間を通してどのような作物がどれほど店舗に並ぶのか、四国地方において実店舗を事例に検証した研究は少ない。そこで本稿では、香川県三豊市にある良心市たかせを事例に、産直市がどのような特徴を持った販売施設であるのかを、季節性の観点から月別の売上高の推移を分析することで明らかにした。

結果として、本稿では2つの特徴を確認することができる。第一に、地元の作物を年間を通して提供することができるという点と、第二に、販売品目の季節性が顕著に表れるという点である。これらは一見相反する特徴のように見えるので、以下に詳しく振り返っておきたい。

まず、地元の野菜が年間を通して提供されるという第一の特徴は、特に売上高上位を占める主要な野菜類で確認できた。比較対象とした高松中央卸売市場では、キャベツやタマネギなど、月によって県産品が全く扱われず、県外産の野菜で補う品目もいくつか確認された。一方、良心市たかせでは、季節によって売上高に大きな変動は当然あるものの、主要野菜に関しては月の売上が全くない品目はごく少数に限られている（イチゴや冬期に仕入れ品の多いタマネギは除く）。産直市では、システム上少量であっても、極端に言えば1個から生産者によって店舗に持ち込むことが可能である。そのため、例えば旬の時期を外れてごく少数しか生産されず、流通のロットに乗らない野菜であっても、店舗に持ち込めば店頭で並べることができる。その

ため、大手の流通では扱っていない旬を外れた県産野菜も、産直市では年間通して手に入れることが可能となる。

次に、販売品目の季節性が顕著に表れるという第二の特徴であるが、これは売上高の多い品目に関しては、果実およびタケノコなどのごく一部の野菜で確認された。これらの品目は、先ほどとは逆に、年間を通して数か月しか店舗に並ばない。タケノコの産地として名高い高瀬町麻地区に店舗を構える良心市たかせでは、タケノコの旬の時期にたった一か月で、野菜の総売上高の5%以上を売上げるなど、ひときわ目立つ結果となった。果実の場合、一年を通じて様々な品物が入れ替わり立ち替わり旬を迎えるようになっており、消費者は常に、地元産の何らかの旬の果実を手に入れることができるようになってきている。

以上のように、本稿では三豊市の良心市たかせを事例に産直市の特徴を、販売する作物の月別売上高の推移から明らかにした。産直市が常々課題としてきた「品揃え」は、本稿の事例においては、年間通して手に入れられる地元産の主要野菜と、リレー形式で旬のものを消費者に届ける果実の販売を合わせることで、バランスよく成り立たせている様子が見てとれた。しかし、このようなバランスを保つことが出来ているのは、良心市たかせが、農家の経営体数が市内でもひと際多い地域に立地し、多くの農家が作物を持ち込みやすい環境にある店舗であり、かつ香川県の産直市の数が少ない時期に開設したことで、早い時期から大きく成長してきた店舗であるからであろう。全国の産直市の立地や規模は多様であるため、今後はさまざまなタイプの産直市にも着目する必要がある。

謝辞

良心市たかせ取締役の辻野行則氏には、経営に関わる貴重なデータを提供していただいた。また、三豊市の産直市に関する情報については、三豊市農政部農林水産課の皆さんに教えを請うた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) JA 香川県 ホームページ (<https://www.kw-ja.or.jp/rarirure/cucumber/>) 参照。
- 2) 高松市公式ホームページにおける高松中央卸売市場の統計データ (<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kurashi/shiset-su/chuoichiba/tokei/shijonenpou03.html>) 参照。
- 3) 夏場はイチゴの場合は徳島県および外国産が主であり、ブロッコリーの場合は北海道および長野県産が主となる。

文献

飯坂正弘 2003 「農産物直売所における POS データの分析」『農業情

- 報研究』12(1): 55-58.
- 井上和衛・中村攻・山崎光博 1996『日本型グリーン・ツーリズム』都市文化社.
- 河田員宏・藤原利行 2010「農産物直売所における野菜の品揃え改善の一方策」『近畿中国四国農業研究』16: 109-116.
- 高瀬町誌編集委員会編 1975『高瀬町誌』高瀬町.
- 高瀬若アユ会 1992「地域農業に一石を投じる」『農業香川』1992年1月号: 54.
- 高梨子文恵・正木卓・泉谷眞実 2020「農産物直売所出荷が野菜複合経営に与える効果」『農村経済研究』37(2), 72-80.
- 高橋秀彰 1995「産地直結販売と産地直売について」『農業香川』1995年10月号: 16-17.
- 高松市創造都市推進局産業経済部 2022『令和3年市場年報（高松市中央卸売市場・高松市公設花き地方卸売市場）』（<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kurashi/shisetsu/chuoichiba/tokei/shijonenpou03.html>）: 2022年10月15日閲覧）
- 21 ふるさと京都塾編 1998『人と地域をいかすグリーン・ツーリズム』学芸出版社.
- 農林水産省生産局技術普及課 2008「直売所を中心とした地産地消の推進～経営のさらなる発展へ向けて～生産局技術普及」農林水産省.
- (https://www.maff.go.jp/j/shokusan/gizyutu/tisan_tisyo/tyokubai_suisin/pdf/pamph.pdf : 2022年11月15日閲覧)
- 農林水産省都市農村交流課 2009「グリーン・ツーリズムの現状と展望」(https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/kg/pdf/1siryu2.pdf)
- 藤田武弘・内藤重之・細野賢治・岸上光克編著 2018『現代の食料・農業・農村を考える』ミネルヴァ書房.
- まちむら交流きこう 2018「農林水産物直売所・実態調査報告～全国農林水産物直売所の実態調査から見た、直売活動の今」(<https://www.kouryu.or.jp/service/pdf/marketsurvey2018.pdf>)
- 三島徳三 2005『地産地消と循環的農業』コモンズ.
- 吉田雄介・平侑子 2022「統計からみる三豊市合併以前の農業生産の概要」『観光振興研究』2(3): 42-58.

(受理日：2023年1月31日)

(せとうち観光専門職短期大学・助教，准教授)

Email: yuko-taira@g.seto.ac.jp

yusuke-yoshida@g.seto.ac.jp